

ピアノ弾き歌い学習支援におけるICT利活用の効果と課題

長嶺 章子

Effects and Problems of the ICT Utilization in Learning Support for Singing with Playing the Piano

NAGAMINE Akiko

本研究の目的は、保育士試験受験者を対象としたピアノ弾き歌い学習支援における、ICT利活用の有効性について明らかにすることである。この主題は、保育者養成校における先行研究の蓄積はあるが、多数の社会人を含む保育士試験受験者を対象とした研究は見当たらない。そこで、筆者が実践してきた試験対策講座（音楽表現実技）の社会人受講者を対象として、質問紙調査を実施した。その結果、対象者は時間的・経済的・社会的な制約がある状況で学習していることが明らかとなった。そこで学習における障壁を解消するため、対面授業にICTを組み合わせたブレンディッドラーニングのシステムを構築し実践した。講義動画の視聴により時間や場所を問わず学習し、携帯端末で自身の演奏を記録して振り返ることにより、自己評価能力が高まることが読みとれた。多様なニーズに対応し、学習効率を最大限に高めていくブレンディッドラーニングの有効性が示された。

キーワード：保育者養成、ICT教育、保育の表現技術、音楽表現、ピアノ弾き歌い

1. 問題と目的

保育士試験受験申請者数は年々増加しており（2015年46,487名/2016年70,710）、多数の社会人が受験している。社会人受験者の多くは保育者養成校には通学せず、民間企業の通信講座や予備校、または参考書等を利用して独自に学習している状況である。また、保育者養成校学生と同様にピアノ弾き歌い初心者が少なくない。そこで、こうした学習者の音楽表現実技（ピアノ弾き歌い）の学習を支援するため、筆者は2010年4月に実技試験のピアノ弾き歌いに関する講座を開講した。講座は毎年試験の1～2ヶ月前に開講し、2017年7月までに約460名が受講した。2014年には紙媒体のテキストを、2015年には動画教材を制作し、eラーニングと対面講座を併用するブレンディッドラーニング⁽¹⁾のシステムを構築した。保育者養成の音楽教育研究については、保育者養成校の学生を対象とした研究の蓄積はあるが、社会人学習者⁽²⁾を対象とした研究は現在のところ見当たらず、現状や課題が明らかにされていない

状況である。しかし、専門性の高い保育者を養成するために、こうした学習者を対象とした研究も必要であると考えられる。

そこで、社会人学習者のうち、調査対象者の特徴と学習目的について明らかにし、ICTを活用した学習支援の効果と課題について考察することを本研究の目的とする。

ピアノ弾き歌いの学習支援にICTを多様な方法で取り入れる実践は、保育者養成校では数多くなされており、先行研究の蓄積がある。

深見ほか（2009）は、模範演奏DVDの視聴を併用する遠隔・非対面指導を実践し、映像教材の視聴と指導者の助言を組み合わせることにより「自身の演奏に気づきが生じた学生にめざましい進歩が見られる（p.31）」ことを明らかにした。また、同（2010）においては、eラーニング教材の限界と、対面指導による補完の必要性についても明らかにした。さらに、同（2012）においては、履修者が個人所有する携帯端末を使って録画し、履修者にインターネット

上の指定サイトにアップロード提出させる実践に取り組み、利用状況や問題点について報告している。

小倉・田中（2011）は、初心者の自習を支援するツールとして学習者に模範演奏（音源）を提供する試みを継続するなかで、学習者が音源を聴取するデバイスはパソコンよりも携帯電話のほうが多いことを調査により明らかにし、音源提供メディアをパソコンから携帯電話に移行することに取り組んだ。また、携帯電話により双方向（学生間、学生と教師）のコミュニケーションがしやすくなることに着目し、模範演奏を聴くという受動的な利用にとどまらず、自身の演奏を振り返ったり、他者の演奏を聴いたりして学習者間や教師と学習者の間で、励ましのコメントをやりとりするSNSを開発し、モチベーションを維持する効果についても明らかにした。

本研究は、学習支援の方法という側面から見たときにはこれらの先行研究に類似する点も多いが、その対象者が保育者養成校学生ではなく、社会人学習者である点が大きな相違点である。社会人は、多くの場合その置かれる立場や学習環境が現役学生とは異なり、時間や費用等の点で制約がある場合がほとんどである。筆者の取り組みは、こうした制約の多い学習者を支援する目的で始まった。つまり、対面授業は最小限にして、場所や時間を問わず学習することができ、しかも試験合格のみを目的とした外発的動機づけに終始せず、保育者としての自律的・継続的な学習へと導く内発的動機づけも目指した学習支援システムである。したがって、養成校の授業のように、指導者との直接的な交流の時間はたいへん少ない。自学自習を軸に、要所で指導者の助言を得て軌道修正しながら学習到達目標の達成を目指すものである。本稿は、このシステムの効果と課題について、対象者の調査結果から考察するものである。

2. ブレンディッドラーニングによる学習支援システムの詳細

ブレンディッドラーニング（blended learning）とは、教育工学において広く使用されている用語であり、対面授業とICT学習を効果的に組み合わせたシステムを指す。筆者の実践におけるブレンディッドラーニング・システムは、①パソコンや携帯端末等により講義動画を視聴し予習する（2-1）②対面

授業に出席して助言を受け、学習者の演奏を携帯端末で撮影し持ち帰る（2-2）③各自で自分の演奏についての振り返りを行い、自主練習を積み重ねる（2-3）④模擬試験により仕上げる（2-4）、というながれとなっており、対面授業に携帯端末・タブレット端末・パソコン等を組み合わせたシステムとなっている。以下、詳細について述べる。

2-1 eラーニングで予習（導入）

講座への申し込みから初回の対面授業に出席するまでには、予習できる期間があるが、初心者にとって、学習の目的・目標・ねらいや学習方法について正しく理解したり計画を立てたりすることを独りで行うことは困難である。そこで、初回受講前に、これらのことについて解説した動画教材を視聴させることにより、予習を支援することにした（図1）。これにより、学習者は最初からの確かな方法で予習を進めることができ、限られた学習時間内で、学習効果の高い予習をすることが可能となった。動画教材は、学習者の所有する携帯端末・タブレット端末・パソコン等、ほとんどのデバイスで視聴できるように制作し、時間や場所等の制約を受けずに視聴できるよう配慮した。なお、この時点で紙媒体のテキストも併用させている。動画を視聴しながら、テキストを読み進めることにより、より一層理解を深めてもらうことがねらいである。この講義動画の内容は表1のとおりである。このようにeラーニングによる予習支援により、時間的な制約のある学習者でも、無駄なく効率的に学習を進めることを可能にした。



図1 手元を表示しながら解説する講義動画

表1 講義動画(予習用)の内容

CONTENTS	
Lesson 1	実技試験『音楽表現に関する技術』解説 出題文の解釈 1. 出題文をもう一度読む 2. 出題文を読み解く(下線①～⑩のポイント解説)
Lesson 2	弾き歌いの準備と練習のすすめかた 課題曲の準備 1. 調を決める 2. 伴奏を選ぶ 3. 楽譜の準備 4. 演奏の準備 5. 発声基礎練習 6. ピアノ演奏の準備 7. ピアノの基礎練習 8. 課題曲 弾き歌いの練習
Lesson 3	入室から退室までのシミュレーション 1. シミュレーションはとても大切! 2. 試験のながれ 3. 入退室シミュレーションと解説 4. これは危険!—合否の分かれ目 5. もしも途中で間違えても 6. 服装について
Lesson 4	よくある質問
Lesson 5	メッセージ 1. ピアノ初心者の方へ 2. ピアノ中級・上級者の方へ 3. ぜったい合格!のキーワード

2-2 携帯端末を活用した対面授業(展開①)

対面授業は、1回80分間で5名程度の小グループによるレッスンである。レッスンの流れについて述べる。

① 発声・歌唱練習

まずグループで、つぎに個別にというように、歌うことへの抵抗感を段階的に軽減していくことにより、最終的には独りでのびのびと発声できるようになる。また、はじめは立って行方。ピアノにいる講師(筆者)から最も遠く離れた壁際に立ち、筆者と大きな声で会話をしたり、歌う練習をしたりすることにより、広い空間を活用してのびのびと発声したときの感覚を体感する。広い空間を活用して独りでのびのびと歌唱できるようになったところで、ピアノの周りに集合して着席し、再度同じ声で歌唱する。すると、聴き手との距離や空間の広さによって自分の発声のエネルギーが影響を受けることに気づく。つまり、聴き手との距離が近い場合や狭い空間

においては、無意識のうちに小さな声になる。これは、われわれは通常、声を出す場面に応じて適切な声量を瞬時にコントロールしたり、緊張や不安、自信の無さ等の精神状態が声量に現れたりするためである。こうした、声量と精神状態・空間・状況との相関については普段、意識されることは少ないと考えられる。この体験をさせた後に、このことに気づかせる言葉かけをすると、学習者は自分の発声の変化について客観的に理解することができる。理解したうえでピアノに着席し発声させると、自身の声を意図的にコントロールする意思が芽生える。そして、その場に園児がいない状況であっても、保育室の広い空間や園児たちの存在を想定した、のびのびと明るい発声による歌唱が可能となる。

② ピアノを弾きながら歌唱する練習

次にピアノを弾きながら歌唱する。この課題は自身でピアノ伴奏をしながら歌唱するというものであるが、学習者はこの時点で、前項で習得した発声や歌唱をすっかり忘れてしまい、ピアノを弾くことだけに意識が集中してしまうのが常である。そこで、歌唱について思い出すよう指摘することが筆者の役割となる。このように、客観的な自己評価ができない状態に対する支援は、技能の習得においては不可欠なことである。対面授業はこうした「自己評価の支援」の役割を担っている。ブレンディッドラーニングのメリットの一つである。

③ 学習者の演奏と講師(筆者)の助言を録画する(図2)

対面授業の仕上げとして、学習者の所有する携帯



図2 筆者による撮影

端末を筆者が操作し、学習者の演奏と筆者による助言を録画して持ち帰らせる。

2-3 モバイル・ラーニングで復習（展開②）

つぎに、学習者には携帯（モバイル）端末を利用して記録した自身の演奏映像を、自宅での練習の時に繰り返し視聴し、客観的に振り返ることを勧める。これまでの学習と併せてこの振り返りの活動を行うことにより、適切に自己評価をしながら、自主学習を進められるよう支援することが目的である。さらに、自宅での反復練習の過程で自身の演奏映像を撮影して振り返り、演奏の変化について確認することも課題とする。この実践により、学習者自身で目指す演奏イメージが明確になっていき、イメージ通りの演奏をするためにどのようなことを修正すればよいか、主体的に考え練習に取り組む姿勢が身についていく。

2-4 模擬試験で確認・評価（まとめ）

講師（筆者）による評価と講評を行い、技能の定着を図る（図3）。これまでに、対面指導とeラーニングを効果的に組み合わせながら、学習の目的・目標・ねらい・学習（練習）方法についての理解を深め、技能を定着させてきている。これにより、保育士試験に合格するという外発的動機付けだけではなく、保育者として必要なピアノ弾き歌いの技術について継続的に学び、スキルアップしていきたいという内発的動機づけがなされる。資格取得後も保育者として学習を継続する必要性を理解し、学習意欲が芽生えた状態で修了となる。



図3 対面での評価・講評

3. 研究の方法

研究協力者を対象として質問紙調査を実施し、回答の意味内容から考察した。

3-1 研究協力者

調査対象は、筆者の開講した保育士試験実技直前対策講座の受講者である。2013年～2016年の受講者133名に協力を呼び掛け、参加者を募集したところ、22名の参加協力を得た。属性については後段で述べる。

3-2 調査方法・調査期間

質問紙調査は、複数選択（いくつでも可）や自由記述を組み合わせた自由回答の形式で、2016年12月～1月にかけて実施した。

なお、調査依頼の際に目的について説明するとともに、回答内容を研究論文その他で使用する際は個人が特定されないよう配慮するとして、同意を得たうえで実施した。

表2 主な質問項目

質問1.	保育のピアノ弾き歌いで、大切なことは何だと思われますか？試験対策講座の受講前と受講後、それぞれの考えを教えてください（複数可）。
質問2.	保育士に、ピアノ弾き歌いの技術が必要なのはなぜだと思いますか？受講前の段階で考えていたこと、受講後から現在の考えをそれぞれ教えてください（複数可）。
質問7.	講座の予習動画（受講者必修の講義動画）の利用状況について 7-1. 動画を何回くらい視聴しましたか 7-2. 何曜日の何時ごろ視聴しましたか（曜日×時間帯の表に○を記入） 7-3. 視聴に利用した機器（スマートホン・タブレット端末・パソコンから選択し使用頻度を記入）
質問8.	授業時に自身の機器で記録（撮影）して持ち帰ることについて 8-1. 記録（撮影）しない場合と比較して、学習効果はいかがですか？（4択） 1. とても効果を感じた 2. やや効果を感じた 3. あまり効果は感じなかった 4. まったく効果を感じなかった 8-2. 1または2の方、具体的な効果について詳しく教えてください。

3-3 調査内容

表2は、質問項目のうち本稿に直接的に関わる主な項目である。本調査は記名式であり、これらのほかに回答者の属性等バックグラウンドについても調査した。

4. 結果と考察

4-1 属性から見る学習者の特徴

回答者の性別は、22名中女性が20名、男性が2名である。年齢構成は図4のとおりであり、40歳以上60歳未満が全体の73%と多数を占める。また、男性1名・女性1名を除く20名が既婚者、20名のうち18名は子どもがいる(図5)。つまり、家事や家族の世話等をすることが日常であり、時間や費用を自分の学習のためだけに費やすことが難しい点も共通している。この点は、概ね19歳～22歳で構成される保育者養成校の学生との大きな相違点といえる。

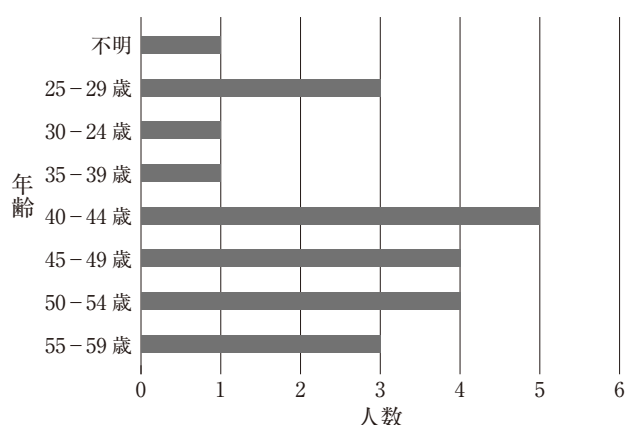


図4 回答者22名の属性（年齢）

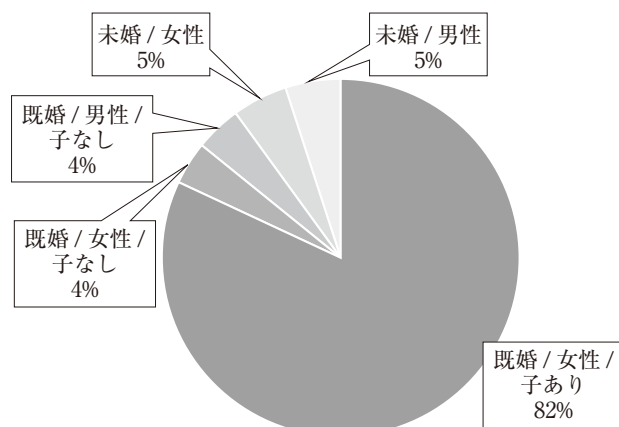


図5 回答者22名の属性（性別・未既婚・子の有無）

4-2 多様な学習目的—保育所以外の就職先も

回答者22名の勤務先は、病児保育・学童保育・児童養護施設等の職員を目指している、あるいは既に非常勤職員として勤務している、また自身の育児のために子どもの発達について学ぶため等、保育所勤務を目的としない者もいる(図6)。22名中10名(45%)は保育所以外で勤務しているか、無職である。この実技試験の課題であるピアノ弾き歌いは、保育所保育士の仕事を想定しているものである。この調査結果にある保育所以外の勤務先では、ピアノ弾き歌いの機会は無い。また、保育所に勤務する者でさえ12名のうち10名は仕事でピアノ弾き歌いの機が無いと回答した。これには幾つかの理由が挙げられた。保育施設の多様なスタイルにより、小規模でピアノがない環境である・社会人から保育士に転職する者は主担任の補助的な役割にまわることが多く、ピアノを使った活動を担うことが少ない・保育所の方針でピアノを使わずに保育を行っている等の理由である。つまり、対象者22名のうち20名は資格取得後にピアノ弾き歌いの機会がないということが明らかになった(調査時点)。具体的に勤務先や勤務内容が決まっている学習者や、逆に保育所で働く予定が無い学習者にとって、実際に使うことがない技能について内発的動機づけにより自律的に学習することは困難なことであると考えられる。このことは、通信講座等で学ぶ社会人にとって、学習の目的・目標やねらいの理解を難しくしている要因のひとつともいえる。こうした部分については、対面授業において、学習者が疑問点(なぜこの学習が必要なのか等)をその場で質問できるようにするなど、

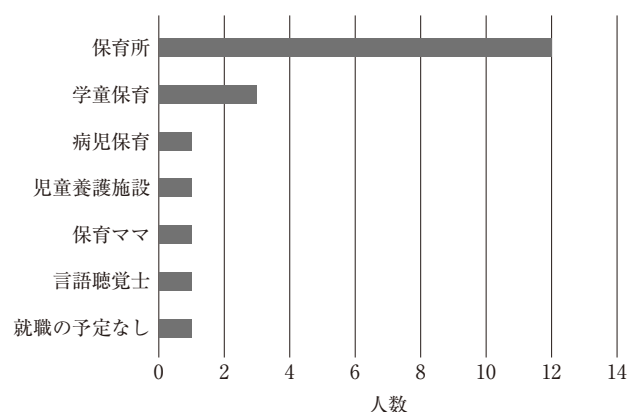


図6 資格取得後の就職先

学習者と指導者が直接やりとりできる環境を準備することにより、理解を促し目標をもって学習を進められるよう支援することが大切となる。

このように、必要に応じて最適な支援を提供できる点は、ブレンディッドラーニングの利点であるといえる。

4-3 多様な学習方法を可能にするeラーニング

図7は、対象者における講義動画（予習）の視聴時間帯の分布である。分布図から、早朝から深夜まで、また平日・休日を問わず視聴者がいたことが読みとれる。なかでも毎晩19時から0時の間に最も多くの視聴者がいることから、やはり昼間の時間帯は学習のために費やすことが難しい学習者の状況がうかがえる。さらに、少数ながら深夜1時から3時や、早朝4時から6時にも視聴者がおり、学習者の生活時間が多様であることが読みとれる。また、動画を視聴した場所も多様である（図8）。自宅で視聴した者が73%と大半を占めるが、試験会場・電車・車・歩きながら・職場・外出先という視聴者も少数でありながら存在した。

こうした結果から、学習者の生活は多様であり、講義動画の視聴という方法は、個別のニーズに対する柔軟な対応を可能にし、学習機会の拡大に寄与するといえる。完全な自学自習の場合、動画の視聴のみで指導者の直接指導が無いため自己管理が難しく、学習の途中で挫折する者も少なくないと考えられるが、ブレンディッドラーニングにおいては、講義動画の視聴の後に対面授業が控えており、講師（筆者）による学習の経過確認や指導および評価が

行われる。こうしたシステムが、正しい理解と適切な方法による学習を支援したり、途中で学習をやめてしまうことを防いだりしており、多様な学習者を緩やかに管理しながら計画的な学習を支援することにつながっていたと考えられる。

4-4 携帯端末による演奏映像の撮影と振り返りの効果

調査の結果、対象者22名のうち、授業中の演奏映像録画と振り返りの活動について、「とても効果を感じた」を選択したものが21名、残り1名は「やや効果を感じた」を選択しており、効果を感じているものが100%という結果であった。質問8-2、効果についての具体的な記述（表3）では「客観的に振り返ることができる」や「自分を客観視できる」というように「客観」という言葉を全ての回答者が用いたことから、客観的に自己評価することが、技能を習得するうえで最も効果的な行為であると実感したことが読みとれる。また、録画データには演奏だけでなく、筆者による助言も併せて記録されている。これを繰り返し視聴して確認できることにより、指導内容がより深く理解され、技能の習得において効果があったと考えられる。ICT利活用方法の中でも、この携帯端末を活用した振り返りの実践は、客観的な自己評価を可能とし、学習者の到達目標を明確にし、意欲を高め、自律的な学習へと導くことが読みとれた。以上のことから、的確な自己評価と学習効率には相関があると考えられる。今後、このことに焦点化した調査・研究も検討したい。

(単位：人)

曜日 時間帯	月	火	水	木	金	土	日
1-3					1	1	
4-6	1	1	1	1	1		
7-9	4	3	4	3	3	2	2
10-12	3	3	5	4	4	6	7
13-15	2	2	2	2	2	5	5
16-18	5	3	4	2	5	1	3
19-21	6	5	6	7	5	2	7
22-0	7	5	5	4	7	9	5

図7 講義動画の視聴時間帯の分布

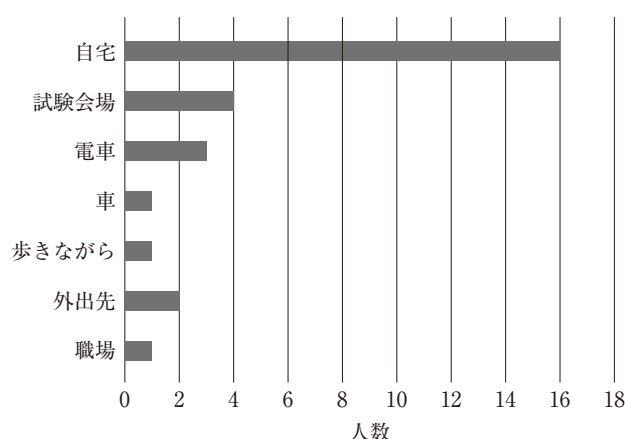


図8 講義動画を視聴した場所

表3 演奏映像の振り返りに関する自由記述の例

質問8-2. (演奏映像振り返りの) 具体的な効果について

- ・客観的に自分を見ることができた。
- ・音程がはずれている所、間違えやすい所を確認できた。
- ・先生のアドバイスの声が入っていて安心できた。
- ・思ったより声が聞こえていることがわかり、安心した。
- ・思ったより声が出ていないことに気づけた。
- ・自分が他者からどう見えるのか、実際と想像はだいぶ違いました。(姿勢・声のトーン・表情など) それを自分の理想に近づけられる効果があったと思います。又、先生と自分の違いも、何度も見直せるので比較して改善しやすかった。
- ・自分の声の大きさ、表現力がどれくらいなのか？何が不足しているのか？が、よくわかりました。
- ・授業でアドバイスされたことを思い出しながら見ることができた。
- ・試験当日、試験直前の待ち時間に見て、イメージトレーニングした。(速さとか。指を動かして、口はシャドーイングした)

4-5 ピアノ弾き歌いの技能に対する考え方の変化

この講座の社会人学習者は、他分野から保育・幼児教育分野に転職しようとする学習者であり、なおかつ保育者養成校に通学せず通信講座等を利用して自学自習している状況である。このような学習者が、保育におけるピアノ弾き歌いについてどのような考えを持っているのか、また、講座の受講前後でその考えにどのような変化があったのかについて、質問1と2で調査した。

4-5-1 質問1「保育のピアノ弾き歌いのポイントについて」

筆者の指導経験から、学習者は保育のピアノ弾き歌いについて正しく学習する前の段階では、ピアノを間違えないで弾くことと、歌唱の音程が正確であることが評価項目の全てであると考えており、ほかに大切なポイントが理解できないらしいことが実感としてあった。実際には、豊かな表情や音楽性、園児たちと心が通う魅力的な表現といった「表現力」こそが大変重要な評価項目なのであるが、受講に訪れる初心者は、このようなことには全く考えが及ばないらしく、「自分はピアノを間違えなかったのになぜ他の人より評価が低いのか」という類の発言にしばしば出会った。こうしたことから、学習者に対し、豊かな音楽表現とはどのようなものなのか、「豊かな感性」「豊かな表現」ということについての思考を促し、理解を深め、自身の演奏を適切に自己評価できるようにする必要があると考えた。そこで、予習のための講義動画ではこの「表現力」の部分について、筆者の実演をふんだんに取り入れながら特に時間をかけて解説している。その結果、受講の前後で学習者の考えに変化が生じたのかどうかを質問1において調査した。回答は、11個の選択肢を設け、受講前と受講後について、同じ選択肢から複数選択させる方法により、変化を調べた(資料1)。図9は、11の選択肢について、受講前後の選択者数の変化を表している。11の選択項目は意味内容から5つに分類することができる。すなわち、①ピアノ

資料1 実際の質問紙の一部(質問1)

質問1. 保育のピアノ弾き歌いのポイントについて

保育のピアノ弾き歌いで、大切なことは何だと思いますか？試験対策講座の受講前と受講後、それぞれの考えを教えてください(複数可)。どちらも同じ場合は、両方とも○を付けてください。

受講する前に大切だと思っていたこと	受講した後(現在)、大切だと思うこと
1. ピアノの演奏法に関する知識 2. ピアノで複雑なフレーズを間違えずに弾けること 3. リズム感が良いこと 4. 発声の技術 5. 歌の声が大きいこと 6. 歌の音程が正確であること 7. 歌の表情が豊かであること 8. 歌詞の内容に合った表現を考えること 9. ピアノと歌の音量バランス 10. 他者(子ども)に聴かせるために歌うという意識を持つこと 11. 子どもの様子を気にかけてながら歌うこと	1. ピアノの演奏法に関する知識 2. ピアノで複雑なフレーズを間違えずに弾けること 3. リズム感が良いこと 4. 発声の技術 5. 歌の声が大きいこと 6. 歌の音程が正確であること 7. 歌の表情が豊かであること 8. 歌詞の内容に合った表現を考えること 9. ピアノと歌の音量バランス 10. 他者(子ども)に聴かせるために歌うという意識を持つこと 11. 子どもの様子を気にかけてながら歌うこと

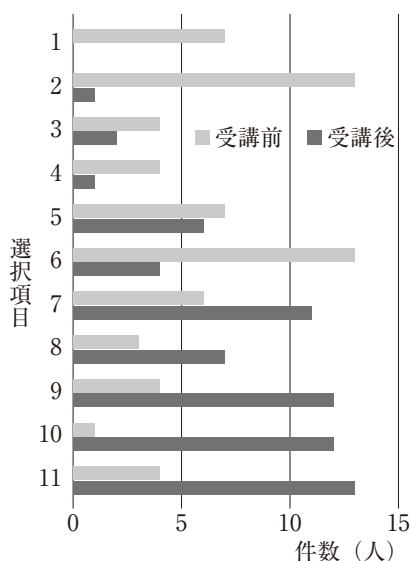


図9 受講前後の選択者数

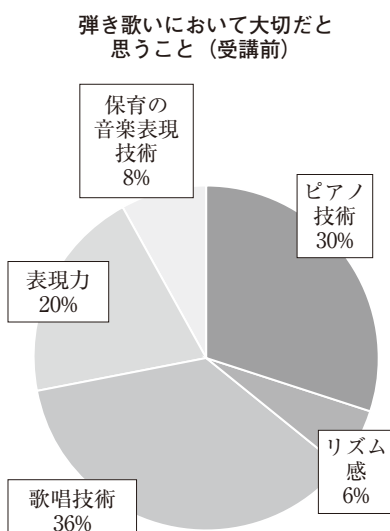


図10 意味内容ごとの選択者数の割合 (受講前)

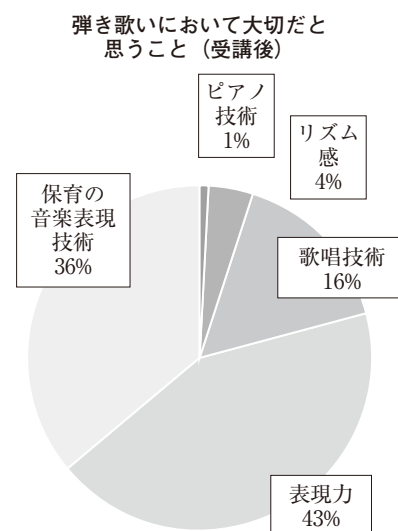


図11 意味内容ごとの選択者数の割合 (受講後)

技術に関する内容（選択項目1, 2）、②リズム感に関する内容（選択項目3）、③歌唱技術に関する内容（選択項目4, 5, 6）、④表現力に関する内容（選択項目7, 8, 9）、⑤保育の音楽表現技術に関する内容（選択項目10, 11）の5つである。この大分類における受講前後の選択者数の変化をみると、受講前には学習者の72%が、ピアノや歌唱の正確な演奏技術こそが重要であると考えており、表現力や保育の音楽表現技術の大切さについて選択した者は28%と、その重要性が理解されていない結果であった（図10）。ところが、受講後には、演奏技術が重要と考える者は21%程度となり、それよりも保育士として、幼児に伝わる豊かな表現力のほうが重要である（79%）というように、すっかり考えが逆転したことが読みとれた（図11）。

こうしたことから、ブレンディッドラーニングによる学習支援には、学習のねらいについての理解を深め、学習の方針を正しい方向へ導く効果があったといえる。この結果は、音楽初心者学習者も、高度な演奏技術はさほど必要ではないことを知り、それよりも大切な要素が他にあり、それは初心者でも出来ることである（豊かな表情・心を込めた表現・園児に対する気配り等）と理解することにより、学習意欲が格段に向上し、制約のある学習環境下においても学習効率を最大限に上げて到達目標を達成できることを示したといえるであろう。

4-5-2 質問2「保育士がピアノ弾き歌いをする意義について」

質問2では、なぜ保育士にピアノ弾き歌いの技能が必要だと考えるか、講座の受講前後で考えに変化があったのかどうかについて調査した。学習者自身が学習の必要性を実感することは、講座終了後に自律的な学習を継続するための内発的動機づけへとつながる。保育士試験の実技試験は、試験に合格することを学習目的とする外発的動機づけに陥りやすい。しかし、保育士資格を保有する者は、資格取得後も向上心を持って研修を継続し、専門性を高めていくことが必須である。筆者の講座では、初心者の学習者を単に合格させることのみにとどまらず、資格取得後も学習を継続する意欲を高めて終了することを目標としている。この目標が達成できたかどうかについて参考にするために、質問2を設定した。回答方法は前項と同様に、学習の前後で同じ項目を設定し、変化について調べる方法を採用した（資料2）。

結果は、受講前には41%が「昔から保育園幼稚園の先生はピアノで弾き歌いするのが普通だから」を選択しており、ピアノ弾き歌いの必要性について特に考えを持っていなかったことが読みとれた。この項目を選択した者の割合は、受講後には5%となった。他の項目2, 3, 4についても、受講後の選択者数が増加しており、講座での学習が保育園・幼稚園での音楽表現活動について考える機会となったことが読みとれる（図12）。

また、このことについて特に考えを持っていなかった者（1を選択）が、学習を経て、ピアノ弾き歌いは不要である（6を選択）という考えを持つに至ったケースも見られた。不要だと考える者の理由の記述を見ると、受講前と受講後では理由が異なることが明らかとなった（表4）。受講前にピアノ弾き歌いは不要だと考えていた者は、仕事で使わないから無駄な学習であるというように、実用性のみを考えていた。一方、受講後に不要と考えた者は、学習をとおして考えたことについて実用性とは異なる視点で述べている。すなわち、幼児の音楽表現指導法においてはピアノを使わない方法もあるとする意見である。こちらの場合は、学習意欲が無いわけではなく、既成概念にとらわれず広い視野を持とうと

する考えであり、ピアノ弾き歌いに限定した内発的動機づけは無いかもしれないが、幼児の音楽表現指導法という領域で見れば自律的に学びを深めていくことが期待できる。

表4 保育にピアノ弾き歌いは不要だと考える理由

受講前に不要だと考えた理由
・勤務先で演奏の機会が無いため
受講後に不要だと考えるようになった理由
・ピアノ以外に音楽表現や歌唱を楽しむ方法があると思うから。
・ピアノだけが全てではない。自分にできることで実践すればよいと思う。

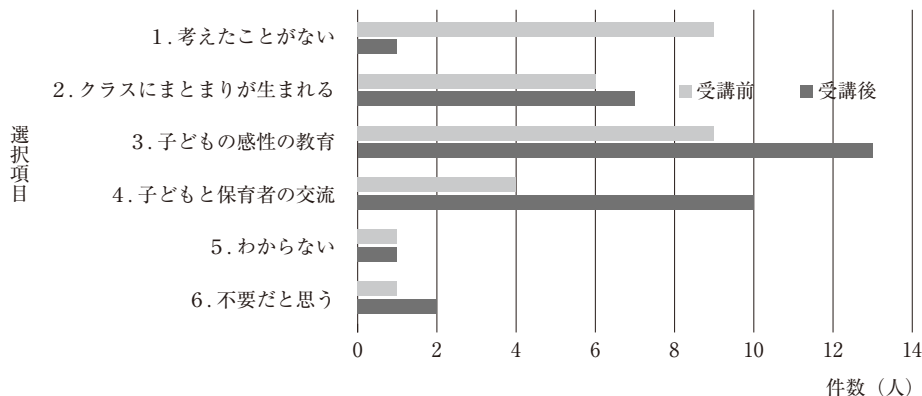


図12 ピアノ弾き歌いの必要性に関する考えの変化

資料2 実際の質問紙の一部（質問2）

質問2. 保育士がピアノで弾き歌いをする意義について

保育士に、ピアノ弾き歌いの技術が必要なのはなぜだと思いますか？受講前の段階で考えていたこと、受講後から現在の考えをそれぞれ教えてください（複数可）。どちらも同じ場合は、両方とも○を付けてください。

受講する前に考えていたこと	受講した後（現在）の考え
1. 昔から保育園幼稚園の先生はピアノで弾き歌いをするのが普通だから 2. 保育士が生活の歌を弾き歌いすることで、子どもの集団生活がまとまりのあるものになると思う 3. 保育士が弾き歌いすることは、子どもの感性を養うことにつながると思う 4. 保育士の弾き歌いによって、子どもは保育士に親しみを感じると思う 5. 弾き歌いがなぜ必要なのか、考えてもわからない 6. 保育園の保育士はピアノ弾き歌いをしなくてもよいと思う 理由：	1. 昔から保育園幼稚園の先生はピアノで弾き歌いをするのが普通だから 2. 保育士が生活の歌を弾き歌いすることで、子どもの集団生活がまとまりのあるものになると思う 3. 保育士が弾き歌いすることは、子どもの感性を養うことにつながると思う 4. 保育士の弾き歌いによって、子どもは保育士に親しみを感じると思う 5. 弾き歌いがなぜ必要なのか、考えてもわからない 6. 保育園の保育士はピアノ弾き歌いをしなくてもよいと思う 理由：

5. まとめと今後の課題

本稿では、保育士試験の社会人受験者を対象とした、ピアノ弾き歌いの学習支援におけるブレンディッドラーニングの効果について考察した。

携帯端末やタブレット端末に対応させた動画教材による学習は、場所や時間を問わず繰り返し視聴できるため、時間に制約のある学習者でも学習することを可能にする。この利点を生かして、保育のピアノ弾き歌いに必要な表現力といった学習のねらい等の解説については動画教材で繰り返し視聴させ、理解を深めるための支援をした。さらに、学習者自身の演奏に対する助言のように、直接的な個別指導が必要な部分については対面授業を行うことにより学びを深めた。また、eラーニングのみを利用する自学自習では、途中で挫折する学習者もいると考えられるが、要所で指導者による評価や講評等の直接的な支援を設定することにより、学習者は最後まで挫折することなく学習目標を達成することが可能となった。この実践の結果、受講者は全員が初心者でなおかつ短期間（1～2カ月間、平均受講回数約3回）の受講であるが、試験には全員が合格した。

このように、ICTと対面授業、双方の利点を生かすブレンディッドラーニングにより、学習効率をできるかぎり高め、学習環境に制約がある場合においても技能を習得することが可能であることが、本研究により示された。学習のしやすさや、理解できた・上達した、という実感が得られることは、学習者の意欲や結果に直結していくことから、ICTをこのように合理的に活用していくことは有効であると考えられる。

また、本研究におけるブレンディッドラーニング・システムの中では、学習者の演奏を携帯端末で録画し振り返りの活動を行うことが、学習者にとって最も高い有効性が実感されていることが調査結果から読みとれた。自身の演奏映像を振り返ることにより、客観的な自己評価が可能となり、このことが学習者の目標を明確にし、意欲を高め、自律的な学習を促していると考えられる。つまり、的確な自己評価ができることと、学習意欲、その結果としての学習到達度には相関があると考えられる。したがって、自己評価能力をより高める実践方法や、自己評

価能力を測定する尺度について検討することにより、ICTのより効果的な利活用法の開発が期待できる。今後の課題としたい。

謝辞

調査にご協力くださいました受講者の皆様、および本稿執筆にあたり貴重な助言をくださいました本学学長の中澤潤教授に、厚く御礼申し上げます。

付記

本稿は日本保育学会第70回大会におけるポスター発表「保育士試験受験者を対象としたピアノ弾き歌い学習支援—成人学習者の特徴と支援の意義—」について再検討し、加筆したものである。

参考文献

- 小倉隆一郎・田中功一（2011）「モバイルラーニングを利用したピアノ学習」、『文教大学教育学部紀要』（45），pp.123-130
- 厚生労働省（2008）『保育所保育指針解説書』，フレーベル館
- 深見友紀子・中平勝子・赤羽美希（2009）「ピアノ弾き歌いにおける遠隔・非対面指導の効果と課題」、『京都女子大学発達教育学部紀要』（5），pp.31-40
- 深見友紀子・中平勝子・赤羽美希・稗方攝子（2010）「ピアノ弾き歌い学習におけるeラーニング教材の効果」、『京都女子大学発達教育学部紀要』（6），pp.35-46
- 深見友紀子・中平勝子・赤羽美希（2012）「携帯端末を使用した演奏映像提出の現状と今後の課題」、『京都女子大学発達教育学部紀要』，vol.8，pp.97-105
- 文部科学省（2008）『幼稚園教育要領解説』

注釈

- （1）ブレンディッドラーニング（blended learning）
「集合研修とeラーニングを組み合わせ、双方のメリットを活かした研修や学習の方法。学習の動機付けやスキルの習得を集合研修で行い、知識の習得はeラーニングで実施するのが一般的である。研修の時間や経費の削減だけでなく、それぞれの手法の特徴を活かした効果的な研修が可能になる。」特定非営利活動法人日本イーラーニングコンソシアムWEBより（<http://www.elc.or.jp/keyword/detail/id=147> 2017/09/04参照）
- （2）教育研究においては「成人学習者」とするのが一般的であるが、本研究においては保育者養成校学生との区別を明確にするねらいで「社会人学習者」と表記する。